

社員の仕事の効率が向上したとか、工場の生産の効率が悪化したなど、日常生活で効率という言葉は普通に使用されている。分野によって効率の定義は様々であるが、共通している概念は投入した入力に比較して出力された仕事の程度を測定した数値ということである。五人の人間が仕事をして五個の製品を生産している工場と、十人の人間が仕事をして五個の製品を生産している工場とは、後者の効率は半分ということになる。

このような概念に現代の人間は脅迫されているといっても過言ではない。しかし、この効率という概念は、近代の産業革命の時期に急速に登場してきたものである。それは産業革命の契機となった技術が蒸気機関や内燃機関のような、一定の燃料を投入して最大の仕事を獲得することに意味のある性質のものであったことに由来する。すなわち工業社会の性質を端的に表現する概念が効率であったということになる。

ところで現在はIT革命によって情報社会に移行しているが、それでも効率という概念は意味があるかというところ、ないわけではない。一日に五件の書類を処理できる人間と十件の書類を処理できる人間と比較すれば、後者の人間が二倍の効率で仕事をしており優秀という評価になる。しかし、書類の処理は情報に關係した仕事であるが、一般には情報処理といわれる、極端に言えばコンピュータなど機械で代替できる仕事である。

情報社会での、もうひとつ重要な仕事は、提案の起草、法律の制定、小説の執筆、音楽の作曲など、情報創造といわれる分野である。この分野についても、一年に五冊の小説を執筆する作家より十冊の小説を仕上げる作家のほうが効率は二倍であるというように、効率の概念は適用可能であるが、それは本質ではない。一年に一冊しか出版しなくても、社会にもたらず影響や、売上の部数が多大な小説のほうが価値はある。

情報処理と情報創造と重要なのはどちらかといえば、後者であることに異論はない。これからの情報社会を発展させていくためには、この情報創造について評価する概念を社会に定着させていくことが必要である。工業社会では個人も企業も効率という基準で仕事を評価することによって発展してきたが、情報社会の本質である情報創造について、社会全体の通念となるような基準がなく、それが情報社会の展望を明確にしていない。

それでは、どのような概念が適切かといえば、個別には新規、全体では多様という概念ではないかと推察する。小説でも音楽でも、これまで存在していなかったような作品は価値があるが、すでに類似の作品が発表されていれば、価値は激減するどころか、犯罪になる場合さえある。それが多大な評価を獲得するかどうかはともかく、これまで存在しなかった内容を創造することが第一の要件である。

そのような新規の情報に次々と提供されれば、その結果、全体としては多様な情報が存在する社会になる。このような前提で、現在の日本の社会を概観してみると、多様という概念は主流ではない。一流の学校から一流の企業へ就職するとか、髪型や服装は流行のものを真似するとか、どちらかといえば周囲と類似している、もしくは同一であるということに関心がある社会である。

これは工業社会の通念が色濃く残存しているということであり、それを打破していくことが必要である。日本は明治以来の明確な国家政策により、後発でありながら工業社会に適合し、世界有数の工業国家になることに成功した。しかし、この過剰適合とでもいうべき成功が情報社会への転換を阻害していると解釈できなくもない。効率を脱却して多様を追究することがIT革命成功への王道である。